
乃公は中華蕎麦が食べたい

灯裏カナエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乃公は中華蕎麦が食べたい

【Nコード】

N4023U

【作者名】

灯裏カナエ

【あらすじ】

「——この話が酷いのは、乃公にとっては笑い話でもなんでもなく確実に中華蕎麦が食べたいという感情が強く、うずまいていることだ。故にこれは、乃公にとっては悲劇性以外の何色も持たない。」
物語の主人公である乃公^{おれ}こと倉坂誠人は、自分のこだわりを自力で抑えられない人間だと自負する地方の大学生。そんな彼がある日、通学途中にふと抱いた「乃公は中華蕎麦が食べたくなるのでは」という予感は的中して——。スタイリッシュ中華蕎麦推理少女かわいい小説。

かつて文化祭に出展したものと同じ作品です。

お前——そう、今乃公の言ってるのを見てる、丁度お前だ。お前は、こんな経験がないだろうか。そう。道を歩いていると、あるとき突然シュークリームが食べたくなるとか、今日の晩御飯はカレーじゃないと我慢できないと思うとかだ。

いや、そんな強い感情じゃなくても、いい。たとえば食堂に入ったときにメニューを選ぶだろう。あのとき、たいていの場合には乃公やお前の中には『食べたいもの』という心情、そしてそれが指し示すメニューが存在する。

つまりは、乃公はこれから、そういうことの話をする。そういうことと言うのは、要するに乃公がただ『食べたいもの』にたどり着くまでの経過をしめす。いや、たいていの人にとってはつまらないというのは充分承知の上なのだ。

しかし、乃公にとって重要であったこのことを、誰にも伝えないというのはまったく勿体無いと思えて仕方がないのだ。故に、乃公の書く文章を読んで貰えないとしても、それは全く仕方のないことで——いや……ここで多くを語る必要はないのだ。さっさと本題にうつろう。そうしないと、食の記憶はすぐに薄れてしまう。あの食行為を乃公は確実に、忠実に、文章に、文字にしないといけないのだから。

乃公の場合、その対象は中華蕎麦だった。中華蕎麦。わかるだろうか。どうも地域によっては中華蕎麦とラーメンの区別がつかないことも多いみたいだが、少なくとも乃公にとっては中華蕎麦というのは、古式ゆかしい——言い換えれば、昭和の味がしそうな、素朴な、凝っていない、『ハイカラな』醤油ラーメンのことだ。

たとえばラーメン屋がある。味噌、塩、醤油、とんこつ——それは何れも美味しいラーメンだろうし、乃公もしばしば外出時にお世

話になることがある。しかし、中華蕎麦とラーメンは違う。それは、確実に現実の事実であり、乃公の求める中華蕎麦とは醤油ラーメンのことではない。

たとえば乃公の家の近くに中華蕎麦の店というのが有る。そこは随分な老舗だそうで、中華蕎麦を専門に扱う店らしく、夜になると光る店の看板にもデカデカと中華蕎麦の文字が躍っている。まあ、しかし——乃公が食べたい中華蕎麦は、そんな簡単で、単純なものでもない。本当に、食堂の一メニューとして並んでいるような、気取ることもなく、他のメニュー、うどんや日本蕎麦とともに並ぶ存在としての中華蕎麦だ。

そのような店はなるべく近代的でなければいほどよいだろうと乃公は思う。たとえば最近増えはじめたようなチェーンの食堂ではダメ……いや、ダメというわけでもないが、不満足だった。

とにかく、その感情は突然に訪れたということと、対象が中華蕎麦だったこと、その二点が乃公にとっては重要だった。

さて、ひとまず乃公の中華蕎麦に対する愛情の説明はしたので、自己紹介をしなくてはならないだろう。乃公は、とある地方都市に構える大学に通う大学生だ。名前は倉坂誠人という。ちなみにこの情報は乃公と中華蕎麦に何の関連をも持たない。忘れてくれても結構なぐらいだが、まあ記号として記しておくことも悪くないだろう。まあ、どちらにせよ乃公についてはこんなところだろうか。これでようやく本題に入れることになる。

時は丁度夏休みも終わって間もない頃、朝の八時半のことだ。その日も乃公は大学から4 kmほどの最寄駅に降りて、駅併設の立体駐輪場に止めてあったオンボロ自転車を引き張り出してきた。乃公は高校の頃からこの駅を使っていたが、今年大学二年になるということ、丁度この自転車にお世話になるのも五年目になる。

自転車を押すと、昨日帰る途中にライトをつけていたようで、ギョルギョルとライトの発電機構の回る音がした。すかさずこれを足で蹴ってライトのスイッチをオフにする。

自転車にまたがって、ペダルに体重をかけると、オンボロながらも整備を怠らなかつた乃公のシティサイクルは軽快に駐輪場の出口スロープを滑り出した。

駅から学校まではそう離れていない。朝の空気もいいし、何よりこの町は小さな古都とでもいふべき場所であり、昔の城下町の町並みがそのまま残っているのだ。気分よく風を受けつつ、ここより田舎に位置する大学への上り坂を進む。

その時、ふいに鼻のあたりを衝くように、嫌な感じがした。

よくある感覚だった。何か一つのこと執着すると、一日でも二日でもそのことを忘れられない性格は父親譲りで、もし何かが頭に入り込んだのだとすれば、非常にまずい。おそらく今日の講義は頭に入らず、上の空でそのことばかり考えるだろうと。

そして、程なく、田と貯水池の見える下り坂に差し掛かったあたりで、乃公の予感確信へ、いや、執着へ変わる事になった。

——中華蕎麦が食べたい。

冗談抜き感覚である。乃公は中華蕎麦が食べたい。そう、最初から法則付けられていたようにそのフレーズは乃公の脳に浸透してきた。

中華蕎麦だと？

乃公は、自分の脳に生まれたその言葉に自然と反対の意思を表明せずには居られなかつた。奇妙な話と思うかもしれないが、仕方ないことだ。なぜならば、乃公は中華蕎麦が好きで堪らないのだ。そんな自分が中華蕎麦を食べたいというからには、よほどの中華蕎麦だろう。そんなものがこの平成の世で喰えるのか？ はなはだ疑問であつた。こんな望みを抱いてしまつて、乃公は一体どうするつもりなのだろうか。遺言が「乃公は中華蕎麦が食べたい」になつてしまつた等と、笑い話にされてしまう。

この話が酷いのは、乃公にとっては笑い話でもなんでもなく確実に中華蕎麦が食べたいという感情が強く、うずまいていることだ。故にこれは、乃公にとっては悲劇以外の何色も持たない。そして、

その悲劇性こそがさらなる滑稽さを生むことだろう。ああ、嫌だ。乃公はなんとしても中華蕎麦を食べねばならぬ。乃公出でずんば、誰が――。その時は、そういう感覚しかなかったと言ってもいいだろう。

そして乃公は、そこから先、まさに地獄とも思える一日を過ごす事となった。まず、大学への道のりからして、危険極まりないものであった。乃公の自転車は乃公の理性的意思に従わず、本能から中華蕎麦を探すようになった。それは、乃公の舵を何か強大な力に乘っ取られる感覚に近かった。

乃公はなんとかして大学へたどり着くべく、右へ左へ千鳥る自転車のハンドルを腕力で前に向け、眼は睨み付けるように道を見据えて自転車の操舵をせざるを得なかった。

そして、大学についてからも大体予測どおりであった。勿論授業は身に入らず、食堂でうどんやラーメンしか載っていないメニューを見た乃公は頭から血が抜けていく感覚とともに倒れこんだ。

気がつくと放課後であった。乃公は未だに全く中華蕎麦を諦めていなかった。保健室の天井を見上げ、むくりと起き上がると白い壁にアクセントとして映え、いっとう目立っていたライム色の時計を見て時間を確認した。16時30分。一日の授業終了を告げる鐘の音で眼が覚めたようだった。

道楽でもなんでもない。乃公は立ち上がって保健室の担当医に礼を告げると、手早く大学の敷地を去った。しかし、通学域である4kmからほど近い範囲に中華蕎麦を出す食堂はあるのだろうか。

乃公は、一旦この田舎から引き上げるべきか、それとも帰らずに店を探すべきか、迷いに迷った。残り2時間30分はこの古都を回れるだろう。そして――田舎の方が、確実に古い食堂が残っている可能性が高い。しかしながら、それがつぶれている可能性も勿論、田舎の方が高いのだ。

おそらくは乃公が喰える中華蕎麦とは、非常に高い制約がついていることだろう。前述のような中華蕎麦の定義に加え、載っている

具にも制約が出てくる。たとえば、メンマである。もし、店の人がメンマ——”m e m m a”と発音すれば、乃公はその店を泣く泣く立ち去らねばならぬ。シナチクである。シナチクと呼ばれているそれしか、乃公は認めないに違いない。そして、ナルトである。ナルトはもちろん、渦巻き型の模様がっているものでなくてはならず、近年醤油ラーメンでデフォルトとなってきた感のある青菜などは載せてはいけない。

青菜を載せる暇があれば、ノリとネギを入れるべきであろう——それらすべてが乃公の中華蕎麦に対する思い入れであった。

まずは山の方……北へ針路を向けた。いつだって体力の有るうちに、きつい場所へ行くべきであるのは明白であろう。山のほうには観光に適した寺院や神社が多くあり、そちらにいけば食堂も残っているかもしれないと考えた。

田園風景はいつもの数倍以上の速度で後ろに飛び去っていき、乃公の自転車の速度は益々上がる一方だったが、乃公の中華蕎麦はまだこの速度を足りないと感じていた。

ほどなくして自転車は市内最大の寺へたどり着いた。あたりはまだ人で賑わっており、みやげ物屋なども営業していた。乃公は自転車から降りると、あたりを手早く見渡した。ない。

どうやらこのあたりでは蕎麦屋のほうが多いようだった。乃公は蕎麦にもこだわりがあるので、少し興味を覚えないこともなかったが、今はそんなことよりも中華蕎麦が先決だった。そういえば、乃公は今日の昼に大学の食堂で倒れたせいで、昼飯を口にしていないのだ。朝を食べない派の乃公は結果として、昨日の夕食から何も取っていないことになる。

千両みかん、という落語がある。まだ冷凍技術のない時代、夏にみかんを食べたくなってしまう、その悩みから病気にかかってしまった金持ちの家の息子である男が、使いを走らせ、方々回って、たったひとつだけ、千両のみかんを手に入れさせる話だ。この男の気持ちは、乃公には、よくわかる。

結局男はみかんを食べられるわけだが、問題といえばこの男のよ
うに我が家に金があり余っているわけではないという点だ。乃公は
病床に伏せれば、——死ぬ。

やはり事態は非常にまずかった。このままでは、中華蕎麦を食べ
られない思いとともに老いて死を憶えるどころか、食事を口に出
来ず、中華蕎麦を食べられないこと、そのために死んでしまう。乃公
はやはり真剣であつた。しかし、誰にも伝わらないのだろう。な
らば、乃公は確実に口にしなければならぬ。友のために。親類のた
めに。

そうと決まれば早々にこの場所を去るべきであろう。針路は直ぐ
南西に代わる。山から流れる川のラインを下れば、県庁所在地であ
る広大な平地へたどり着く。その手前程度に、田舎と都市の混ざつ
たような区間がいくらか存在する。このあたりならば、もしくは食
堂があるかもしれないと目星をつけた乃公は、6時になった空を見
上げた。朱に染まる空。少し前まではまだまだ夏の夜といった風情
があつた空は、すっかり早く日が落ちるようになってしまつていた。
川沿いに下ること1時間。乃公は少し開けた市街地へ出ていた。

市街地には様々な店が立ち並び、乃公が探していた食堂にほど近
いものも見つかった。古い中華料理屋である。古い中華料理屋は、
なぜか食堂に比べて生き残りやすく、生存しているケースが多い。
しかし、これらの店は外見こそ古いものの、中に入ればブームに押
されたラーメンが出されることも少なくない上、食堂よりも外観か
らメニューを判断しにくい。俺はやむなくこれらの店に入ることを
断念した。時刻はもう7時をとくに回っており、陽は完全に暮れ
ていた。

さらに暫くの時が経つたが、一向に食堂は見つからなかった。ど
ころか、潰れているものすら見つからなかった。乃公は軽い目眩を
覚えるほどに精神的に衰弱し、ついには地にへたり込む羽目になつ
た。

飲食店を探す行動と言うのにはもともと無理があつて、先延ばし、

先延ばしにするほど『これだけ時間をかけたのだから』という思いが強くなり、料理へのハードルがあがっていくことになる。このままでは、十分に満足できる品は食せない可能性がある。

しかも間の悪いことに、朝、昼と食事を抜いて数時間のあいだ自転車走らせ続けた乃公の体は既に限界に来ており、周辺で一番大きなショッピング・モールの休憩場所に椅子を借りて、今後の予定を考えていた。そう、乃公の精神も、もしくは限界に来ていたのだろう。ある言葉がふと心の中を流れていくのを感じた。

——もういいのではないか。

もう、中華蕎麦が食べられなくともいいのではないか。乃公が中華蕎麦を食べられないというのは、最初から決められていたのではないか。これを食べられずに乃公が衰弱して死んだとすれば。それは乃公がそのように死ぬと決められていたからなのだ。乃公はこのどうしても抗いようのない中華蕎麦への愛着から逃れることが出来ず、ここでのたれ死ねばいい。

そんな風に考えていた。

正直なところ、乃公には最早歩き回る力も残っていない。喉も渴いた。しかし、財布には700円しか入っていない。とてもではないが、ここで何かを買うわけにはいかない。

乃公は充分頑張ったと思う。乃公の求める、無理な条件に合致する中華蕎麦を求めて、必死に駆けずり回ったと思う。だから、もう諦めても——、あるいは——？

そんな時、目の前に紙コップが突き出された。

「倉坂くん、……だよな？」

乃公には意味がわからなかった。電車通学をしている乃公にとって、ここは完全なる異郷の地であり、ここに乃公の助けは存在しないと考えていたからだ。

面食らった乃公は、「ああ、ああ」と間抜けにうなづくことしか出来なかった。

「まあ、飲みながら聞いてよ。お代金はいいからね？ ええと、…

：倉坂くん、今日食堂で倒れてたでしょう。ご飯とか、家とか、大丈夫じゃないよね？」

そこにあつた顔は紛れもないクラスメイト、長井久歌のものだった。乃公が座つた高さとはほど代わらぬ身長150cm程度の身体で乃公に尋ねてくる長井を一瞥して、同時、一気に飲み干した。そして、息もつかずに言葉を発する。

「ああ、そうだ。——乃公は帰らないといけなかったんだ。」

乃公は全身に血が回り始める感覚とともに、己の体から迸るエネルギーの奔流を感じていた。行ける。俺はまだまだ『帰れる』のだ。「わざわざ、悪かったな。この埋め合わせは必ず……」と、去ろうとした乃公を、長井の声が引きとめた。

「いやいやいやいやいやいやいや。え、ちょ、ちょっと待ってよ。倉坂くん、それじゃボク的に今の行動が無駄になるよ！」

女の子が全力でフラグ立てしたのをスルーとかこの鬼畜だよ！？」何がダメなのがわからなかった。全身に力がみなぎっている今しかダメじゃない時はないじゃないか。乃公は、何がダメなのか直ぐに聞き返す。

「いや、……もう、しょうがないなあ。」

そして、そう言つて息をつく、後の言葉を一気に言い切つた。

「だって倉坂くん——中華蕎麦のお店を探しているんでしょう。」

壮絶なシヨックであつた。

……長井というのはこんな奴だっただろうか。俺の記憶の中になり、クラスメイトの姿がそこにあつた。大きな眼はキラキラと輝き、いたずらっぽい印象と知性を同時に感じる姿だった。さながら、探偵小説に出てくる名探偵のように。

「食堂で、メニューを見て倒れた、強情っぱりで、頑固な、倉坂くんが——なぜかボクの住んでる街をうろろろして、しかも次々と中華料理屋を見て失望しているのを見れば、ボクでなくても、わかるといったような物だよ？ 最初はすごく謎だったけど。」

長井はそのまま、続ける。ずっと監視されていたのか……乃公の

精神は、やはり限界に来ていたようだった。普通ならば、気づいてもいいようなものだと感じる。

「君は、中華蕎麦のお店を探している。間違っていないよね？」

頷いて先を促す。

「……その通りだ」

しかし、どうしろというのか。ならば、尚更乃公は中華蕎麦の店を直ちに探さねばならないのではないのか？

「君は今、前後不覚の状態にある。極度の栄養不足、判断能力の低下。だから、君は中華蕎麦の店を探そうとしている。それじゃ、ダメだよ。」

「まあ、一理あるのかもしれない。しかしだ。だからと言って、乃公に行動の指針はない。つまり——乃公はどうすればいいんだ？」

「ボクが君の頭脳になろう。君の代わりに、理性と知性と冷静を以って——そんな大層でもないか。中華蕎麦を扱う食堂を、見つけてあげるよ。」

それが本当なら、願ってもない望みだった。しかし。

「もし、見つけれなかったときは、どうするつもりだ？」

「その時は、ボクが君のために中華蕎麦を作ってあげようっ。……ダメか。あはは、まあ、どうしても時間が勿体無いなら、無視して行ってくれてもかまわないよ。でもね、君は多分もう……中華蕎麦の店を見つけてるんだから、何の心配もない。」

……乃公が中華蕎麦の店を見つけている？

「そんなクレイジーな話が……。いや、いい、続きを聞こう」

その時の乃公は、女学生の手料理のことなんか考えても居なかった。今はどうしてあんな勿体無い、むしろ作ってもらったほうがよかったのではないかと考えているが——いや、どうでもいい。なんなら後で作ってもらえばいいのだ。むしろ、この話の趣旨は未だに中華蕎麦を向いているのだから。

結局乃公は長井の話を聞くことにした。どちらにせよ、もう当てはなく、どこへ行けばいいのかもわからなかったからだ。それと、

このキラキラ輝くめだまに、少々期待があつたとも言える。

「えつとねえ……じゃ、倉坂くん、今朝、なんで中華蕎麦を食べたと思ったの？」

「それは……いきなりとしか言えないな。理由は特にないと思う」

「そんなことはないと思うんだよねえ……。倉坂くん、どこから通つてたっけ」

乃公は駅名を答えた。

「で、駅からどれぐらいのところで、食べたくなつたの？」

「そうだな……1 km、と言つた所か……。」

この問答に意味があるのか、わからなかったが、長井は全く諦めていない。何だというのだろうか。どうして、乃公が中華蕎麦にこだわつた場所が？

「なるほどなるほど。そうだね、やっぱり、倉坂くんはこの調子じや見つけれないよ。さつさとおうちへ帰る道を行きなさい。ボクもついてつてあげるから。」

——ん？ なんだ……。今、帰れ、と言われたのか？ いや、違うな。そんな気がしない。この長井は、一体どういう思考をしているのか、測りかねるところがあるが、ここで乃公に帰れというわけがない。

「ほら、いいからいいから。倉坂くんを見てたらボクも中華蕎麦食べたくなつてきたし、よっし、がんばつていくぞー！」

乃公は腕を無理やり引つ張られ（振りほどくのは容易であつただろうが、どうみても小学生か中学生にしか見えない長井の腕を振りほどくのは、恥ずかしい）、されるがままに駐輪場までつれてこられた。

「で、どうしろつて言つんだ……」

「とりあえず一緒に駅までいってみようよ。きつと、中華蕎麦、あるから」

結局、はしゃぐ長井に逆らえず、乃公は駅まで自転車を再び走らせることになった。そして、時刻八時を回るかと言う頃に、駅に着

いた。

「随分きちゃったねー。さて、倉坂くん、このあたりに残念候補のうち一つ、『つぶれてる食堂』があるんじゃない？」

またしてもよくわからない。

「は？　つぶれている食堂を開けてもらうわけにはいかないから、結局どうしようもないんじゃない……」

「いいから。あるの？　ないの？」

強い語気で聞かれて、乃公は答えざるを得なくなってしまった。

「あるといえば……ある。あの店は多分潰れているはずだ。そう思つて今朝も真つ先に脳内のリストから削除したんだが……そういえば、中華蕎麦が食べたくなつたあたりの近くだったかもしれない」「つくづく、判断力が低下してるね……。そういうふうになつたとき、いつもそうなの？　そんなことじゃダメだよ。きつとその食堂は潰れてないんだよ。——ボクの思考が確かならば、ね」

「どうして……そう思うんだ？　教えてくれ」

もし、長井が語ることが全部真実だとすれば、乃公は今相当に脳が回っていないのだろう。それにつけても中華蕎麦が食べたい乃公は、最早自分の恥などどうでも良くなつてきていた。

「そりゃ、君にインスピレーションを与えたのがその店だからだよ。君は今の状態ほどではないにしても、中華蕎麦が好きで、それを求めていた。だから、去年、あるいはそれより前からその店を知っていたし、開いていなかったから、潰れていると思つていたんだ。まあ、それゆえに、それでこそ、きつと君が着想を得たのはその店の『中華蕎麦』の文字ではないけどね。そうだったらすぐ削除してるだろうからね」

長井の眼光はますます光っていた。それに対して、乃公はますます脳に疑問を覚えずにはいられない状況になつてきていた。

「ちよつと待て、言っていることがおかしいんじゃないか。着想を得た店から着想を得たわけじゃないって……」

「まあまあ。でもね、ボクが言つてるのは文字のことだよ。君が着

想を得たのは、多分、におい。中華蕎麦の仕込みをするために、換気扇をつけていたのか、とにかく、今日その店は開いてたの。」

「あ……嫌な予感ではなかった——と」

「そう。君は、敏感に中華蕎麦の仕込みに必要ななにがしかの匂いを感じ取り、それを脳の中で分析し、結果数キロ進んだあたりで、中華蕎麦に突き当たったということだよ。」

確かに、そういわれてみればそうだ。どう考えてもそうだとしか思えないようになっていた。判断能力はまだ低下しているのかもしれない。しかし、これまでに乃公ががむしゃらに探してきたよりは、まだ頼りになる予測だと感じた。

「さあ……案内してくれると、嬉しいな。きっとお店は開いているよ。」

「こんな夜でも？」

「普段開いていないお店が開いてるんだ。きっと、理由があるはずだよ。だから、今でも開いてるんじゃないかなあ……。ま、これは完全な予測というか希望でしかないけどね？　そもそも開いてなかったら、お願いでも何でもすればいい話だよ」

希望でも良かった。乃公は、ついに中華蕎麦が食えるのかもしれないかったからだ。そのころ、丁度自転車は件の食堂のあたりに差し掛かっていた。商店街はもうほとんど店じまいを始めていたが、学生はまだまばらに見える。サークル活動が何かで残っていたのだろう。

そんな中、少し入り込んだところに、その店はあった。

換気扇から噴出す空気で上のほうが黒ずんだ壁を持つ、古のたたずまいをそのままに、こちらもまた古い食品サンプルに手書きの値札をつけたショー・ウィンドウ。そう、この店が開いていればいいなあとこの大学へ来てから何度思ったことか。

そして、もちろん中華蕎麦というメニューがあった。シナチクであった、煮卵であった、のりであった、ネギであった、薄くておいしくなさそうなチャーシューもあった。

俺の求めるすべてがそろった品であつた。

中華蕎麦。名にふさわしい商品だ。

「ほら、あつた。」

長井が横で乃公にウインクしたのも忘れかけるほど、乃公は脳を揺さぶられていた。今、まさに店の中からはあの懐かしい匂いがしている。そうだ。そうだ。

つまり、それが指し示すのは一つだ。

もちろん、店に火は灯っているのだ。

乃公は、ゆっくり引き戸を右へ引くと、おもむろに口に出した。

「——乃公は中華蕎麦が食べたい」

追いかけて「ボクも」という声が聞こえた気がする。

不覚にもその後の記憶はあやふやだが、中華蕎麦はやはり……いいものだ。

了

（後書き）

主人公が人称を変えたりしながら、同じ世界観で連作短編っぽくするかも。

連作短編って、どうやって投稿したらいいのかな。連載ってことになるのかな。でも連載って言葉はなんというか、私には大層にすぎるとか。

うーむ、まあ適当にしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4023u/>

乃公は中華蕎麦が食べたい

2011年8月18日03時11分発行